佐渡の白つばき

新潟県

むかし、あるところに、ふたりのあきんどがありました。あるとき、ふたりは、連れ立って旅商いに出ました。

ある日のこと、ずいぶん歩いてくたびれたので、「ここらで一休みしよう」と、ふたりはこしを下ろしました。しばらくすると、年上のほうのあきんどが、

「おれは、眠たくなった」といって、ぐうぐういびきをかいて寝てしまいました。

「おやおや、なんと、早いこと寝こんじゃったなあ」

若いあきんどは、そう思って、何気なく年上のあきんどの寝顔を見ていました。すると、寝ているあきんどの鼻の穴から、アブがいっぴきブーンと出てきて、佐渡島のほうに飛んでいきました。

「おかしなこともあればあるもんだ」と、若いあきんどが思っていると、しばらくして、アブがもどってきて、寝ているあきんどの鼻の穴にもぐりこみました。

やがて、年上のあきんどは目を覚ましました。そして、

「おれ、いま、おかしなゆめを見たよ」といいました。

「どんなゆめを見たんだい」

「あのな。佐渡島にたいへんなお金持ちがいて、その屋敷の庭につばきの木があって、白い花がいっぱいさいているんだ。その木の根元から、アブがいっぴき飛び出してきて、『ここをほれ』っていうんだ。それで、木の根元をほったら、なんと金（きん）のいっぱいつまったかめが出てきた。そんなゆめだったよ」

若いあきんどは、一心にその話を聞いていましたが、

「おれに、そのゆめを売ってくれないか」といいました。

「ゆめなんか買ってどうするんだ」

「なんでもいいから、売ってくれ」

若いあきんどがしきりにたのむので、年上のあきんどは、

「じゃあ、いくらで買う気だ」とききました。

「三百文で売ってくれないか」

そこで、年上のあきんどは、三百文でゆめを売りました。

旅が終わって、ふたりは、ふるさとの村に帰りました。

しばらくすると、若いあきんどは、また旅商いに出るふりをして、ひとりで佐渡島に渡りました。そうして、かなたこなた探しまわったあげく、やっとのことで、つばきの木のあるお金持ちの屋敷を見つけました。

若いあきんどは、そこの旦那さんに、

「わたしは、越後の国から、貧乏して流れてきた者ですが、庭掃きにでもやとってもらえませんか」とたのみました。旦那さんは、

「それはちょうどよいところだ。庭掃きがひとりほしいと思っていたんだ。ぜひ働いてくれ」といいました。

若いあきんどは、毎日まじめに働いて、春になるのを待ちました。

やがて、冬も過ぎ、いよいよ春になると、庭いっぱいに花がさきました。つばきの木にも花がさきましたが、赤い花ばかりで、白い花はひとつもありませんでした。若いあきんどは、それでも気を落とさないで、来年の春を待つことにしました。

つぎの年の春、庭の花がさき始めると、若いあきんどは、白いつばきがさいていないか

と、毎日気を付けていました。すると、ある朝、一本のつばきの木に、白い花がいっぱいさいていました。若いあきんどはよろこんで、夜になるのを待って、こっそり、つばきの木の下に行きました。そして、木の根元を金火箸（かなひばし）でついてみると、こつんと音がしました。そこで、土をどけると、かめのふたのようなものがありました。

「これだ、これだ」

若いあきんどは、ふたを開けてみました。すると、かめの中に、目のくらむような金がいっぱいつまっていました。そこで、かめをほり出して、かくしておきました。

それから半年ほどたって、若いあきんどは、旦那さんに、

「長いあいだおせわになりましたが、そろそろ国に帰ろうと思います」といいました。旦那さんは、

「おまえはまじめによく働いてくれた」といって、いくらかの小づかいをくれました。

若いあきんどは、かくしてあったかめを持って、ふるさとへ帰って行きました。そして、たいそうな長者になって、一生楽に暮らしたということです。

おしまい。

原話：『加無波良夜譚』文野白駒／玄久社

再話：村上郁